

狭心症の新治療法

重症患者に対する新たな治療法が、厚労省の高度医療に承認されました。

重症の狭心症患者の心臓に、弱い衝撃波を体外から当てて血管が新たに作られるのを促し、心臓の筋肉(心筋)の血流を回復させるという東北大病院の新しい治療法なのか。



衝撃波治療装置を操作する伊藤健太、東北大病院教授。心臓のエコー画像を見ながら手に持った部分を胸に当て、衝撃波を放射する。仙台市青葉区の東北大病院で

音とともに、指で軽くなったような感触を手のひらに感じた。

「心臓に衝撃波を当てると聞くと、ぎょっとするが、使用する衝撃波は腎臓や尿管の結石破碎に使われる強度の10分の1。衝撃波には血管拡張作用もあるため、血が温かくなり、気持ちよくなって眠ってしまう患者も多い」と、この治療法を開発した下川宏明・東北大病院(循環器内科)は話す。

痛みや副作用もなし ■泡が発生しマッサージ効果

狭心症は、動脈硬化などが原因で心臓を流れる血管が狭くなり、心筋に十分な血液(酸素)が流れなくなると胸の痛みや不快感を生じる病気だ。

従来の標準治療には、血管拡張剤などの投薬(狭心剤)が狭くなった部分に血管を広げる網目状の金属管(ステント)などを入れるカテーテル治療(別の血管をつなぐバイパス手術)がある。しかし、「最近では生活が欧米化

して動脈硬化が増え、日本人でも心臓の広範囲で血液不足になり、カテーテル治療やバイパス手術で治し切れない患者が増えてきている」と下川教授という。10月初旬に同病院で衝撃波治療を受けた高城稟石巻市の男性(81)は3年前、心臓の表面を走る3本の冠動脈のうち一本にステントを入れたが再び症状が悪化し、最近は一急ぎ足で歩く程度でも胸が痛かった。

ひといいときには、狭心症の発作を抑えるニトログリセリンを2日に1度は服用しなければならなかったという。

男性の治療は伊藤准教授が担当した。心臓のエコー(超音波)画像を見ながら、血流の足りない場所を狙って衝撃波発生装置を胸に当て、心臓が最も拡張したタイミングで心拍に合わせて衝撃波を放射する。肺に衝撃波が当たると危険なため、循環器専門医が行う必要があるという。

1カ所につき衝撃波を200回当て、これを20×40カ所で繰り返す。約3時間にとんだ治療後、男性は「痛みはなく、風が当たっているような感じだった」と話した。男性はこの治療を1日おきに3回受けて退院した。

そもそも、下川教授が衝撃波治療に着目したのは01年。半会で「培養した内皮細胞に衝撃波を当てると一酸化炭素が発生した」というものを、それ以外の検査や入院費は保険が適用される。同病院では今後、50人の患者への治療を実施し、薬事法の承認や全額保険適用に向けた治療データの収集を進める。

下川教授は「人体の持つ自己修復力を生かした治療法と言える。全身麻酔や手術が必要なく、副作用も見られないため、高齢者や他の病気を併発している患者の生活を向上させるのに貢献できる」と話している。

【西川拓 写真】

衝撃波当て、血流回復